

カール・マルクス著
高 畠 素 之 譯

資 本 論

第一卷第二冊

改
造
社
版

資本論第一卷 第二冊目次

第五篇 絶對的並びに相對的餘剩價値の生産	四九二—五一八
----------------------	---------

第十四章 絶對的並びに相對的餘剩價値	四九三
--------------------	-----

第十五章 勞働力の價格と餘剩價値との大小變化	五〇四
------------------------	-----

(I) 勞働日の大小及び勞働の能率が不變であつて、勞働の生産力が可變なる場合	五〇四
--	-----

(II) 勞働日と勞働の生産力とが不變であつて、勞働の能率が可變なる場合	五〇八
--------------------------------------	-----

(III) 勞働の生産力と能率とが不變であつて、勞働日が可變なる場合	五一〇
------------------------------------	-----

(IV) 勞働の持續と生産力と能率とが同時に變化する場合	五一二
------------------------------	-----

第十六章 餘剩價値率の種々なる公式	五一五
-------------------	-----

第六篇 勞 銀	五一八—五五〇
---------	---------

第十七章 勞働力の價値(又は價格)の勞銀化	五一八
-----------------------	-----

第十八章 時 間 賃 銀	五二七
--------------	-----

第十九章 請 負 賃 銀	五三五
--------------	-----

第二十章 勞銀の國民的差異	五四五
---------------	-----

第七篇 資本の蓄積行程……………五五—七六八

緒言……………五五二

第二十一章 單純なる再生産……………五五三

(資本の附屬物としての勞働者階級。資本制生産行程に依つて再生産される資本家對勞働者の關係)

第二十二章 餘剩價値の資本化……………五六〇

(一) 規模の擴大されつつある資本制生産行程。商品生産の所有律の資本制的占有律への推轉……………五六七

(二) 規模の擴大されつつある再生産に關する經濟學上の謬想……………五六六

(三) 餘剩價値の資本及び收入への分割。節慾說……………五七九

(四) 資本及び收入への餘剩價値の比例的分割から獨立して蓄積の大小を決定する所の諸事情——勞働力の搾取程度——勞働の生産力——充用資本と消費資本との差の増進——前貸資本の大小……………五七九

(五) 謂はゆる勞働基金……………五八九

第二十三章 資本制蓄積の一般的法則……………六〇二

(一) 資本の組成不變なる場合に於ける蓄積に伴ふ勞働力の需要増加……………六〇三

(二) 蓄積及びそれに伴つて生ずる集積の進行中に行はれる不變資本分の相對的減少……………六二二

(三) 相對的の過剩人口たる產業豫備軍の累進的の生産……………六二八

(四) 相對的過剩人口の種々なる存在形態。資本制蓄積の一般的法則……………六三九

(五) 資本制蓄積の一般的法則の例解……………六三七

a	一八四六年より一八六六年に至るイギリス	六三
b	イギリスに於ける産業労働者階級中の薄給部分（榮養状態——住宅状態——ロンドン——ニューキアッスル・アボン・タイン——ブラッドフォード——プリストル）	六四
c	浮浪労働者（住宅事情——鐵道労働者——炭坑その他の鑛山に於ける労働者）	六五
d	恐慌が労働者階級中の最厚給部分に及ぼす影響（ロンドン東部に於ける造船船労働者）	六六
e	イギリスの農業プロレタリア（浮浪労働隊）	六七
f	アイルランド	六八

第二十四章 謂はゆる本來的の蓄積

(一)	本來的蓄積の祕密	七〇
(二)	農民に對する土地收奪——（十五世紀の七十年代以後及び十六世紀初期の數十年代に於ける耕地の收場化——宗教改革、及び寺領の奪取——封建的所有のブルジョアの所有化——王政復古と『光輝燦爛たる革命』——國有地の奪取——共同地及びその盜掠——スコットランド高地に於ける所有地の解放、耕地の羊牧場化、及び羊牧場の獵場化）	七一
(三)	十五世紀終末以降に於ける被收奪者に對する殘虐な立法。賃銀引下げの法律	七二
(四)	資本家の小作農業者の發生	七三
(五)	農業革命が工業の上に及ぼした反應作用。工業資本のための國內市場の形成	七四
(六)	工業的資本家の發生（植民制度——國債制度——近世的の租稅制度及び保護制度——大工業の初期に於ける兒童掠奪）	七五
(七)	資本制蓄積の歴史的傾向	七六

第二十五章	近世植民説	七六
-------	-------	----

○

原語及び譯註	1 45
--------	--------

カール・マルクス原著
高 畠 素 之 翻譯

資 本 論 第一卷

カール・マルクス著

資 本 論

經濟學の批判

第一卷 資本の生産行程

この書を私の忘れ難き友、勇敢にして忠實且つ高

潔なるプロレタリア先鋒の闘士ウ・ヘルム・ウ・

ルフ（一八〇九年六月二十一日タルナウに生れ、一八六
四年三月九日、亡命中マンチェスターに客死す）に捧ぐ。

第五篇 絶對的並びに相對的餘剩價值の生産

第十四章 絶對的並びに相對的餘剩價值

我々は勞働行程をば、先づ（第五章を見よ）その歴史的の諸形態から獨立して、抽象的に、人類と自然との間の行程として考察したのであるが、その時述べて曰く『この全行程をば、結果たる生産物の立場から觀察すれば、勞働要具と勞働對象との雙方は生産機關として、また勞働それ自身は生産的勞働として現はれることになる』（第一五二頁）と。而してまた、註（七）にこれを補足して曰く、『この意味の生産的勞働に、單純なる勞働行程の立場から與へられるものであつて、これだけの定義では、資本制生産行程の下に於ける生産的勞働については決して十分でない』（第一五二頁）と。これより、更らにこの問題を展開せねばならぬ。

勞働行程が純然たる個別的の一行程である限り、後に至つて相分離さるべき一切の機能は、同一の勞働者に於いて統合されてゐる。彼れは自然對象をば、彼れの生活目的のために、個人的に占有するに當り、己れみづからを統制する、後に至り、彼れは他人に依つて統制されることになるのである。單一の人類は、彼れ自身の頭腦の統制に依つて、彼れ自身の筋肉を運轉することなくしては、自然の上に作用することが出来ぬ。自然の身體體系に於いて頭と手とが互ひに相まつ如く、勞働行程に於いては、頭の勞働と手の勞働とが統合される。後に至り、兩者は相分離して對抗するやうになるのである。總して生産物はその初め直接に個別的生産者の手で造られてゐたものであるが、それが後には一の社會的生産物に、總勞働者の共同生産物に轉化される。換言すれば、大なり小なりの程度で勞働對象の取扱に關與する所の諸分子から成る結合勞働總員の共同生産物に轉化されるのである。斯様に勞働行程それ自身の協業的性質が擴大されるにつれて、生産的勞働及びその負擔者たる生産的勞働者なる概念も亦、必然に擴大されて来る。生産的に勞働するためには、最早みづから手を下す必要がなくなる。總勞働者の器官となつて、彼れの何等かの副機能を盡せば、それで十分なのである。上述の如き生産的勞働の本來の定義は、物質的生產それ自身の性質から推論したものであつて、全一體として見た總勞働者については依然通用し得るのであるが、斯かる總勞働者

の個別的に見た各分子については、それにはもはや通用しないのである。

だが他方にまた、生産的労働なる概念が狭められることになる。資本制生産なるものは、單に商品の生産たるのみではなく、また本質に於いて餘剰價值の生産をも意味するものである。労働者は自分自身のために生産するものでなく、資本のために生産するのであるから、單に生産するといふだけでは、もはや十分でない。彼れは餘剰價值を生産せねばならぬのである。資本家のために餘剰價值を生産する所の労働者、換言すれば資本の自己増殖に仕へる所の労働者のみが、生産的なのである。物質的生産の圏外から一例を選ぶことが許されるとすれば、學校教師といふものは、單に兒童の頭腦に加工するといふだけではなく、更らに企業者を富裕にする目的で労働するといふ意味が加はるとき、茲に初めて生産的労働者となるのである。企業者が腸詰工場に投資しないで教育工場に投資するといふことは、問題の上に些かの變化をも與へるものでない。要するに、生産的労働者なる概念は、單に活動と利用效果、労働者と労働生産物との間の一關係を含むのみでなく、尙また、労働者を資本價值増殖上の直接の手段たらしむる、歴史的に發生した特殊社會的なる生産關係をも含むものである。されば生産的労働者たることは、幸運ではなく寧ろ不運なのである。正統派經濟學が餘剰價值の生産を以つて、或る時は本能的に、或る時はまた意識的に、最初から生産的労働者なるものの決定的特徴となして來たことは、餘剰價值學說史を取扱ふ本書第四部の中で詳しく説く。正統派經濟學が餘剰價值の性質を如何なる具合に理解したか、それに從つて生産的労働者の定義も亦色々に異なつて來た。例へばフキオクラットの如きは、餘剰價值を供給するものは農業労働のみであるとの見地から、生産的のものは農業労働のみであると主張した。

労働者が彼れの労働力の價值に相當した價值を生産するだけの限點以上に労働日を延長して、この餘剰労働を資本の占有に歸せしめること、これ即ち絶對的餘剰價值の生産であつて、資本制度の一般的基礎たり、相對的餘剰價值生産の起點たるものである。相對的餘剰價值なるものは、労働日が最初から必要労働と餘剰労働との兩部分に分割されることを前提する。餘剰労働部分を延長しようとするれば、ヨリ短時間を以つて勞銀に相當した價值を生産せしむる方法に依つて必要労働部分は縮小されることになる。絶對的餘剰價值の生産は、労働日の大小といふことを中心として回轉し、相對的餘剰價值の生産は、労働の技術的行程と社會的の組合配置とを徹底的に革命する。

要するに、相對的餘剰價值の生産は特殊資本制的な生産方法を前提するものであつて、この生産方法は最初、資本の下への労働の形式的包攝といふ事實の基礎上に、その方法、要具及び條件と相共に原生的に生起し發展するものであるが、後には斯

かる形式的包攝に代つて現實的の包攝が生じて來るのである。

直接の強制に依つて生産者から餘剩労働を汲み取るでもなく、また資本の下に生産者を形式的に従屬せしむるに至ることもない中間的の形態については、ヨリ立ち入つた説明を與へるに及ぶまい。斯かる形態の下に於いては、資本は尙未だ直接に労働行程を征服するには至つて居らぬ。其處には、在來の太初的な經營方法を以つて、手工業なり農業なりを営む個別獨立的の生産者と相並んで、寄生蟲的に此等の生産者を吸ひ盡す所の高利貸附業者又は商人が、高利貸附資本又は商業資本が存在してゐるのであつて、斯種の搾取形態が一社會に主として行はれてゐる限り、資本制生産方法なるものは存在し得るに至らぬ。尤も斯かる搾取形態が資本制生産方法への過渡段階たり得ることは、中世紀の末葉に見られた所である。最後に、斯種の中間的形態の中には、外貌こそ異なれ、大工業の背後に此處彼處で再生産されるものもあることは、近世家内労働の實例が示す通りである。

絶對的餘剩價值を生産せしめるためには、労働が形式的にのみ資本の下に包攝されるといふ條件だけで十分である。一例を舉ぐれば、従前自身自身のため、又はツフト親方の職人として、労働してゐた手工業者が、貸銀労働者となつて、資本家の直接の支配下に立つといふことだけで十分なのである。然るに、相對的餘剩價值を生産する方法は、同時にまた、絶對的餘剩價值を生産する所の方法たるものであることは、曩に述べた通りである。のみならず、労働日の無制限延長が大工業の特殊産物たることも、我々の説明に依つて明かにされた。總じて特殊資本制的の生産方法なるものは、それが一の生産部門全體に互つて行はれるやうになるや否や、もはや單に相對的餘剩價值だけを生産する所の方法ではなくなる。況や、それが各種の生産部門を通じて行き渡るやうになつた時は、尙更らさうであつて、資本制生産方法は今や生産行程の一般的、社會的に支配的な形態となるのである。資本制生産方法が相對的餘剩價值生産上の特殊方法として作用することは、もはや次の兩方面に限られてしまふ。第一には、從來形式的にのみ資本の下に隸屬してゐた産業がこの生産方法に依つて征服されるといふ方面、換言すれば、資本制生産方法が新たにその作用領域を擴大するといふ方面、第二には、既に資本制生産方法の勢力範圍に屬してゐる産業が、生産上の方法の變化に依つて革命されるといふ方面、この二つである。

觀方に依つては、絶對的餘剩價值と相對的餘剩價值との區別は總じて幻想的のものであるやうに見える。労働者自身の生存に必要な労働時間を超えて絶對的に労働日を延長することを必要ならしめるといふ點から觀察すれば、相對的餘剩價值も絶對的となり、労働生産力が發展して、必要労働時間が労働日の一部に制限されることを必要ならしめるといふ點から觀察すれば

絶對的餘剩價值も相對的となる。だが、餘剩價值の運動を念頭に置くとき、斯かる無區別の外觀は消滅してしまふ。資本制生産方法が一度確立されて普遍的となるや否や、總じて餘剩價值率の増進が問題となるとき、絶對的餘剩價值と相對的餘剩價值との區別は感知され得るやうになる。いま、勞働力の代價が價值通りに支拂はれるとして、斯かる假定の下に、餘剩價值率を増進しようとすれば、次の兩方法のいづれか一方に依るの外はなくなる。即ち、勞働生産力と勞働能率の平準程度とが與へられてゐる場合には、勞働日を絶對的に延長すること、また勞働日の限界が與へられてゐる場合には、勞働日の兩部分たる必要勞働と餘剩勞働との相對量を變ぜしめること、このいづれかである。而して貨銀が勞働力の價值以下に低落することを假定しない限り、右の後ちの方法はまた、勞働の生産力なり能率なりの變化を前提することになるのである。

勞働者が彼れ自身及び彼れの一家の生存に必要な生活資料を生産するために時間の全部を要するとすれば、第三者のために無償で勞働すべき時間は殘されぬことになる。一定の程度に發達した勞働の生産力がないとすれば、勞働者は斯種の利用し得べき時間を有しないことになり、斯かる過剩の時間がないとすれば、何等の餘剩勞働も存在せず、隨つて何等の資本家、何等の奴隸所有者、何等の封建領主、一言すれば何等の大なる所有階級も存在しないことになるであらう(一)。

(一)『特殊の一階級としての資本的企業者なるものが存在してゐるといふ、單にそれだけの事實でも既に、勞働の生産力に依存するものである』(ラムセー著『富の分配論』第二〇六頁)、『各人の勞働が自身の生活資料を造るに足るだけであるとすれば、何等の所有も存在し得ないであらう』(レヴンストーン著『公債制度に關する考察』第一四及び一五頁)。

されば、餘剩價值に自然基礎があるとは言ひ得るにしても、それはただ次の如き一般的意義に於いてのみ言ひ得ることなのである。即ち、人が己れの生存に必要な勞働をやめて、これを他人に轉嫁することを絶對的に阻止する所の自然障礙は存在するものでないといふことであつて、これは例へば、他人の肉を食用することを阻止する絶對的の自然障礙なるものが存在しないのと同様である(一a)。

(一a)最近與へられた計算に依れば、既に探險された地球部分だけでも尙少なくとも四百萬の食人者を有してゐる。

斯かる原生的勞働生産力に神祕的觀念を伴はせることは、往々見る所であるが、これは決してなすべきことでない。人類が最初の動物狀態から脱却して、その勞働が既に或る程度まで社會化されるに至つたとき、茲に初めて、一方の人の餘剩勞働が他方の人の生存條件になるといふ事情が生じて來るのである。文化の初期に於いては、勞働の達成する生産力が低微であると同時に、欲望も亦低微に止まつてゐる。蓋し人類の欲望は、それを充足すべき手段の發達と共に、またこの發達に依つて、發

展するからである。更らに、斯かる文化初期に於いては、他人の勞働に依つて生活する社會部分は、直接的生産者の數に比すれば有るか無きかに小さい。而してこの比率は、勞働の社會的生產力が増進するにつれて、絶對的にも相對的にも増進して来る(一)。尙また、資本關係なるものは、久しきに亙る發展行程の產物として與へられる經濟的地盤の上に生ずるものであつて、資本關係の起點たり基礎たる勞働生産力の發達は、自然の賜物ではなく、幾萬年に及ぶ歴史の賜物なのである。

(二)『アメリカ土著のインド人に於いては、殆んど一切の物が勞働者の所有に屬して居り、生産物の九割九分までは、勞働に歸すべきものとされてゐる。イギリスに於いては、勞働者に歸し得る部分は恐らく三分の二に及ばないであらう』(匿名著『東インド貿易の利益』第七三頁)。

社會的生產の發達の大小は暫く措き、如何なる形態の社會的生產に於いても、勞働の生産力は諸種の自然條件から獨立することは出来ぬ。此等の條件はいづれも、人種などの如き、人類を自身に於ける自然と、人類を圍繞する所の自然とに歸著せしめることが出来る。外部的の自然條件は、經濟上二つの大部類に分割される。一は生活資料の自然的富源たる肥沃な土地や魚類に富む河海湖沼など、他は急激なる落流や、航行し得べき河川や、森林や、炭坑や、金屬鑛山などの如き、勞働要具の自然的富源であつて、文化の初期に於いては、前の種類に屬する自然的富源が決定を與へ、ヨリ發達したる文化階段に於いては、後ちの種類の自然的富源が決定を與へる。一例として、イギリスとインド、又は古代世界に於けるアテネ及びコリントと黒海沿岸の諸邦とを比較せよ。

充足を避けることを絶對に許さない自然欲望の數が減じ、而して天然の土地肥沃と氣候の恩澤とが増大するに従ひ、生産者の生存と生殖に必要な勞働時間は、ますます小となり、斯くしてまた、彼れ自身のためにする勞働以上に出づる所の、他人のためにする勞働部分は、ますます大となり得るのである。そこでデオドルスも、古代エヂプト人について斯う述べた。

『彼等の兒童の教育に必要な努力と費用とが如何に僅少であつたかは、全く信じ難き程であつた。彼等は兒童のために、手近にある極めて單純な食物を料理して與へる。また、紙草の莖の食し得る部分をローストにして與へたり、いろ／＼な水草の根や莖を、或は生まで、或は煮たり燻いたりして食べさせる。空氣が溫暖なため、大抵の兒童は靴を穿かず、衣服も著ずに歩行するといふ有様であるから、一人の兒童を育て上げる迄には概して二十ドラム(一)以上を要しない。エヂプトの人口が何故かく多數となり、また何故かく多量の大營造物が同國に與へられたかは、主としてこの點から説明し得る所である』(三)。けれども、古代エヂプトの大建築なるものは、その人口が大であつたといふ事實よりも、寧ろ利用し得べき位置にある人口部分が

大であつたといふ事實に起因してゐるのである。個々の労働者の場合に、必要労働時間が小なれば小なるほど、供給され得る餘剩労働はますます大となる如く、それと同様に、生活必需品の生産に必要な労働者の人口部分が小なれば小なるほど、他の労働に利用し得べき人口部分はますます大となるのである。

(三) デオドルス・シクルス著『歴史文庫』第一卷、第八〇章。

資本制生産が行はれると假定して、他の事情に變化なく、且つ労働日の大小が一定してゐるとすれば、労働の自然條件、なにかんづく土地豊度の如何につれて、餘剩労働の量に變化が生じて来る。斯くいへばとて、豊度の最も高い土地は、資本制生産方法の發達に最も適した土地であるといふ反對の結論は生じて來ない。資本制生産方法の成立は、自然に對する人類の支配を前提するものである。餘りに豐饒な自然は、『人類を手放さないこと、恰も引綱』に頼つてゐる子供の如くである。斯かる自然の下に在つては、人類自身の發達は自然必然事たらしめられるものでない(四)。資本の母國たるものは、鬱蒼たる草木を有する熱帶地でなく、寧ろ溫帶地なのである。社會的分業の自然基礎となり、且つ人類を圍繞する自然事情の變化を通して人類の欲望や、能力や、労働要具や、労働方法などを多様化する刺激となるものは、土地の絶對的豊度ではなく、寧ろ土地の分化であり、土地の自然的産物の多様性である。自然力を社會的に統制し、節約し、人類の手の勞作に依つてこれを大規模に占有又は馴致することが必要であるといふ事實こそ、産業史上最も決定的な役割を演ずるものであつて、エジプト(五)や、ロンバルデーや、オランダなどに行はれた灌漑工事の如きはその例證たるものである。インドやペルシアその他の國々に行はれた灌漑工事も亦、同様であつて、此等の諸國に於いては、運河に依る灌漑が單に必要缺くべからざる水を土地に供給したのみではなく、更らに沈泥の形で礦物性の肥料を山から流し寄せて來たものである。アラビアの版圖に屬するスペインやシシリーに産業が隆興した祕密も、斯かる運河工事にあつたのである(六)。

(四) 『前者(自然的の富)は貴重にして有利なるものであるとはいへ、これがため人々は不注意となり、傲慢となり、凡ゆる不節制に没頭することになる。反對に、後者は周到と、勉學と、技藝と、政策とを強制するものである』(トマス・マン著『外國貿易に依るイギリスの富』別題、外國貿易の差額は富の規準』ロンドン、一六六九年刊、第一八一及び一八二頁(三))。『生活資料が大抵は自然的に生産され、且つ衣服や住宅については、殆んど何等の注意を必要とすることなく又は許容することなき地帯に置かれること——それにも増して、一國民に取り呪はしきことは、私の想像し得ざる所である。……尤も、これと全く反對の極端な場合も存し得る。要するに、労働をしても生産物を得ることの出来ない土地は、労働なくして豊富